

神仏習合から反本地垂迹説への展開： 実者神肯定の歴史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻本, 臣哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2032

The development from the Syncretistic Fusion of Shintoism and Buddhism approach to the anti-Honchi-Suijaku approach: The History of the Affirmation of *Jisshashin*

TSUJIMOTO Shinya

Summary

This paper examines the development from the approach of Syncretistic Fusion of Shintoism and Buddhism to Kanetomo Yoshida's anti-Honchi-suijaku approach, through "Shaseki-shu" and "Shintō-shū", collections of anecdotes in medieval Japan. The anti-Honchi-suijaku approach is affected by Hongaku ("original enlightenment") philosophy, which claims absolute equality and actively accepts the real world. In the adaptation of this philosophy, the affirmation of *Jisshashin*, evil deities which were denied in that period, is an important factor in forming the anti-Honchi-suijaku approach.

In the "Shasekishu", the *Jisshashin* appear as the transformation of buddhas and bodhisattvas in order to encourage people enter Buddhism. However, the *Jisshashin* are not accepted as evil deities. In contrast to "Shaseki-shu", "Shintō-shū" shows some progress regarding the affirmation of *Jisshashin*, where some *Jisshashin* are given the original identities of buddhas and bodhisattvas although they committed crimes, including murder. Though *Jisshashin* are accepted as evil deities, there is no absolute equality between *gonjashin*, the good deities, and *Jisshashin*. This absolute equality is later achieved by Kanetomo Yoshida, who actively accepts the real world and states that there is no difference among the gods. His thought about *Jisshashin* leads to his anti-Honchi-suijaku approach.

This paper follows the work of Yoshirō Tamura (1979), which discusses the anti-Honchi-suijaku approach, Hongaku philosophy, and the affirmation of *Jisshashin*. While his work focuses on Shinto literature, this paper contributes to the field by instead focusing on the collections of anecdotes such as "Shaseki-shu" and "Shintō-shū" which has not been done previously.

神仏習合から反本地垂迹説への展開

——実者神肯定の歴史——

辻 本 臣 哉

神仏習合から反本地垂迹説への展開

——実者神肯定の歴史——

辻 本 臣 哉

〈キーワード〉 吉田兼俱／反本地垂迹説／『沙石集』／『神道集』／本覚思想

はじめに

本稿では、鬼神等、邪神とされた実者神の肯定に注目し、『沙石集』や『神道集』といった説話集を取り上げ、吉田兼俱（一四三五～一五一一）によって完成される反本地垂迹説への道程を検討するものである。この検討を通して、実者神の肯定が説話集によって進展し、兼俱によって完成することを示す。

平安時代に、仏・菩薩が、衆生救済のため仮に神となって現れたと説く本地垂迹説が現れ、鎌倉時代になると、神を、権者神（権社神、権現神、権化神）と実者神（実社神、実類神）に分ける説が定着する。権社神が仏・菩薩の垂迹であるのに対して、実社神は、本地垂迹説の対象とならない邪神である。権者神のみが礼拝の対象となり、実者神は、信仰の世界から排除された。¹⁾

本地垂迹説は、神と仏が同体であることを説くが、仏が本地、神が垂迹であることから、依然仏優位の思想

である。中世神道では、仏教への対抗や、ナシヨナリズムの高まりを受け、新しい思想運動が生まれる。その一つが、神こそ本地で、仏はその垂迹であると説く反本地垂迹説である。この説には、本地垂迹説からもれた実者神の存在が重要となる。すなわち、この実者神が肯定されることによって、反本地垂迹説の形成が促進されると考えられる。

反本地垂迹説と実者神の関係を結びつけるものとして、徹底した現実肯定を行う本覚思想がある。田村芳朗氏によれば、不二相即論を元に、本覚思想を三つの段階に分けている。すなわち、仏が衆生に内在すると説く内在的相即論、現実や衆生を仏の顕現であると説く顕現的相即論、現実の事象こそ永遠の真理であると説く顕在的相即論である。^② 本稿で取り上げる本覚思想は、このうち、現実肯定が強調される顕現的相即論および顕在的相即論の段階のものである。

田村芳朗氏は、神道が反本地垂迹説に至る経緯の中で、両部神道書『中臣祓訓解』^③を取り上げ、二神説（権者神・実者神）が三神説（本覚神・始覚神・不覚神）になったことに注目する。権者神のうち、天照大神などの最高神が本覚神にあてられ、それ以外の権者神は始覚神とされ、実者神は不覚神に区分された。しかし、氏は、三神説に見える本覚思想は理の一元論（理顕本）にとどまったものであり、現実の事物を絶対肯定する本門事常住の主張までには至っていないと説いている。すなわち、実者神の肯定が必要となる。そして、この三神説から、吉田兼俱による反本地垂迹説をつなぐものとして、田村芳朗氏は、鎌倉時代末から南北朝時代にかけての天台宗の僧でかつ神道家であった慈遍（生没年不詳）や同時代の天台僧良遍（生没年不詳）を取り上げている。^④ また、原克昭氏も、三神説に注目し、良遍が消極的ではあるが、実者神を肯定したと指摘している。^⑤ 本稿では、兼俱の反本地垂迹説までの道程において、神道理論ではなく、『沙石集』や『神道集』といった説話集を検討するものである。

一 吉田兼俱による反本地垂迹説

吉田兼俱は、吉田神社の後継者であったが、応仁の乱の混乱で、神社消失という大きな打撃を受けた。しかし、その後『中臣祓』や『日本書記』神代巻の注釈に積極的に取り組み、乱の収束に伴い、これらの講義を本格化させ、吉田神道を確立した。しかし、兼俱は、経典や文書に偽作や偽書を多用し、系図の改竄まで行っている。さらに、政治的な策略を行い、神社界での地位を確立する。そのため、近世では、大きな批判を受けることになる。しかし、彼の神道理論について、伊藤聡氏は、近世神道説の先蹤とも云える存在であると評価している。⁽⁶⁾

兼俱の名著は、遠祖卜部兼延に仮託した『唯一神道名法要集』である。ここで、神道を本迹縁起神道、両部習合神道、元本宗源神道の分け、自らの神道をこの元本宗源神道とする。この元本宗源は、「元とは陰陽不測の元元ヲ明かす。」「本とは一念未生の本本ヲ明かす。」「宗トハ一氣未分の元神ヲ明かす。故に万法純一の元初二帰ス。」「源トハ和光同塵神化ヲ明かす。故に一切利物の本基ヲ開ク。」と定義される。⁽⁷⁾ すなわち、根源的な神を想定している。伊藤聡氏は、吉田神道の基本原理が、森羅万象全て神道の顕現であると説いたことであると指摘している。⁽⁸⁾ また、岡田荘司氏は、兼俱の思想が一条兼良（一四〇二〜一四八一）の影響を受けていると指摘する一方、⁽⁹⁾ 阿蘇谷正彦氏は、これに異を唱えている。⁽¹⁰⁾

次に、兼俱による反本地垂迹説を見してみる。『唯一神道名法要集』では、以下のように説かれている。

「此の後七十年ヲ経テ、真言密教初めテ本朝ニ流ハル。当ニ知るベシ、去んぬる天平に示現し給ふを。胎

金兩部ノ大日盧舎那仏は、一切諸仏菩薩の惣躰也。舎那の生身は、吾が国の本主、日月両神の尊形たること己に明鏡なる者乎。故ニ顕密の二義ヲ設ケ、本迹の二門ヲ立て、宮社の縁起ニ随つテ、相應の諸尊ヲ以テ、本地垂迹の差別を称す。此の事は此の時自り用ひ来れる乎。顕密ノ二義トハ、一ニハ顕露の顕、仏を以て本地ト為シ、神を以て垂迹ト為す。一ニハ隱幽の密、神を以て本地ト為し、仏を以て垂迹ト為す。顕露の顕トハ浅略ノ義也。隱幽の密トハ深秘ノ義也。今、仏を以て本地と為すは、是れ浅略ノ一義也。故に頌に曰はく、

顕露ノ顕は仏を以て本ト為す。浅略の流通ハ結縁ノ為ナリ。

隱幽ノ密は神ヲ以て元ト為す。深甚の重位は眞実ヲ秘す。
と。」¹¹⁾

ここでは、顕露に対する隱幽の優位を説き、この隱幽では、神が本地で、仏が垂迹であることが述べられている。まさに、反本地垂迹説が説かれている。

また、反本地垂迹説として、採り上げられる兼俱の思想として、根葉花実論がある。『唯一神道名法要集』に以下の記載がある。

「第三十四代推古天皇ノ御宇、上宮太子密かに奏して言はク、「吾ガ日本ハ種子を生じ、震旦は枝葉ニ現し、天竺は花実を開く。故ニ仏教は方法の花実たり。儒教は方法の枝葉たり。神道は方法の根本たり。彼の二教は皆是れ神道の分化也。枝葉・花実ヲ以テ其ノ根源ヲ顕はず。花落ちて根に帰るが故ニ、今此の仏法東漸ス。吾が国の、三国の根本タルコトヲ明カサンガ為ニ也。尔りし自り以來、仏法此に流布す」と。神武天皇ヨリ以降、千二百余歳を経て、其の中間に二法無し。唯神国の根本を守り、神明の本誓を崇む。故ニ今、神事の時、仏経・念誦等ヲ去るは是の儀也。」

日本（神道）を種子、中国（儒教）を枝葉、インド（仏教）を花実になぞらえ、仏教が神道から分化したものであると述べている。すなわち、仏教に対する神道の優位が説かれている。この根葉花実論は、両部神道や慈遍によつてすでに説かれているが、反本地垂迹説には至っていない。森瑞枝氏も、慈遍の根葉花実論が神仏同体論に止まっていることを指摘している。¹²⁾やはり、反本地垂迹説は、吉田兼俱によつて完成されたと言える。

二 反本地垂迹説への本覚思想の影響

仏優位の本地垂迹説が、神優位の反本地垂迹説に転換するためには、まず、神と仏を絶対平等とする思想が必要となる。これを担ったのが本覚思想であると考えられる。価値が相対的に高いと考えられているものと、相対的に低いと考えられているものとを平等とすると同時に、価値が低いと考えられているものを肯定する。本覚思想の重要文献の一つ『三十四箇事書』には、天月と水中の月の例えが示されている。ここには、現実肯定による絶対平等の思想が見られる。

「譬へば、天月の体は全く三つも四つもなければども、一切の水にやどるがごとし。一体の上の三名なり、云々。また垂迹の仏を見るに、ただ本地の仏なり。水中の月を見るは、天月を見るなり。愚人は、これを知らず。」¹³⁾

「全く水に移る月を見るにあらず、真に天月を見るなり。迹門かくのごとし。垂迹の仏も別にこれなく、ただ本仏なり。本より天月を見れども、愚人は水中の月を見らんと思ふがごとし、云々」¹⁴⁾

本地の仏と垂迹の仏とが、平等であることが説かれている。同様に、天の月と、それを映した水中の月も平

等となる。相対的に価値が高いと考えられているもの（本地、天月）と、相対的に価値が低いと考えられているもの（垂迹、水中の月）の平等が説かれる。

田村芳朗氏は、『唯一神道名法要集』における反本地垂迹説と根葉花実論の現実肯定から、兼俱と本覚思想との関連を指摘している¹⁵。また、『唯一神道名法要集』に以下のような記載がある。

「問ふ。靈トハ何ぞ哉。

答ふ。靈トハ、一切の諸神、有情・非情の精靈ノ義也。故に頌に曰はく、

器界・生界、山河・大地

森羅万象は、一切神靈なり。

と。」

森羅万象すべて、靈（神）の顕現としていることから、現実や衆生を仏の顕現とする本覚思想に極めて近い思想である。さらに、兼俱は、別の箇所で草木の心も神と説いているが、これも本覚思想の草木成仏との関連性が高い。以上から、吉田兼俱の反本地垂迹説には、本覚思想との親和性がみられる。

三 実者神の肯定

これまで、反本地垂迹説成立の背景として本覚思想の影響について考察してきた。価値が相対的に高いと考えられているものと、相対的に低いと考えられているものを平等とし、価値が低いと考えられているものを肯定する思想があつて、反本地垂迹説が成立する。これを神仏習合や神の分類に当てはめると、権者神と実者

神の平等、実者神の肯定にほかならない。本地垂迹説からもれた実者神をどう評価するかが重要となる。

この実者神は、鎌倉時代から南北時代にかけて全く評価されていなかった。田嶋一夫氏は、法相宗の貞慶（一一五五～一二二三）による『興福寺奏状』、浄土真宗の存覚（一二九〇～一三七三）による『諸神本懐集』、天台宗の僧でかつ神道家であった慈遍による『豊葦原神風和記』において、実者神が否定されていたことを指摘している¹⁷。すなわち、当時、仏教側からも、神道側からも、実者神は全く評価されていなかったことになる。こうした中、説話集である『沙石集』や『神道集』が、実者神に対して、当時の共通認識とは違った評価を行っている。

以下では、『沙石集』、『神道集』、吉田兼俱における実者神についての評価を考察していく。実者神が、どのように肯定され、最終的に兼俱の反本地垂迹説に至るかについて見ていく。

四 『沙石集』における実者神

『沙石集』は、一二七九年に作者無住（一二二六～一三二二）が、五四歳のときに書き始め、翌年完成する。ただし、その後生涯にわたり加筆修正を行っている。無住は、臨済宗の僧ではあるが、様々な宗派を兼学している。そして、宗派に対する彼の立場は、発心のきっかけは一つではなく、どのような教えでも仏教の道に入ることができるとしている。一方、一つの宗派に固執して他の宗派を誹謗中傷することを強く諫めている。そして、無住は、信仰の対象を仏教だけでなく、神仏習合に従い神明にまで広めている。すなわち、神道と仏教諸派の思想とが融合している。例えば、吉田唯氏は、伊勢神宮の内宮・外宮と真言の金剛界・胎藏界を習合す

る思想が、重源等南都再建関係者から無住に引き継がれたことを指摘している¹⁸⁾。無住の神明への関心は、『沙石集』の構成にも表れている。『沙石集』は、十卷から構成されているが、最初の五巻が周到な構想を経たもので、六巻以降が書きたたされていったのと考えられている。この五巻の巻第一が、神明に当てられている。この中で、実者神について述べられている。

「然るに西天上代の機には、仏菩薩の形を現じて、これを度す。我が国は辺地なり。剛強の衆生因果を知らず。仏法を信ぜぬたぐいには、同体無縁の慈悲によりて、等流法身の応用を垂れ、悪鬼邪神の形を現じ、猛獸毒蛇の身を示し、暴悪の族を調伏して仏道に入れ給ふ。されば、他国有縁の身を重くして、本朝相應の形を軽しむべからず。我が朝は、神国として大権跡を垂れ給ふ。我等皆かの子孫として氣を同じくす。因縁然らしめたり。この外の本尊を尋ねば、返りて感應の道は隔たりぬべし。仍て機感相應の和光の方便を仰ぎて、出離生死の要道を祈るべし。」¹⁹⁾

ここでは、実者神という表現はとられていないが、悪鬼邪神や猛獸毒蛇は、まさに実者神である。実者神は、仏菩薩が、衆生教化のために、その姿を変えたものとして説かれている。いわゆる等流法身を説いている。権者神に適用された本地垂迹説を、実者神にも当てはめられている。前述したように、当時、実者神に対して極めて低い評価がされていたことを考えると、『沙石集』の実者神への評価は注目に値する。

巻第一には、天照大神と第六天魔王との密約についての話が載せられている。²⁰⁾

「去し弘長季中に、太神宮へ詣で侍りしに、ある神官の語りしは、「当社には三宝の御名を言はず、御殿近くは僧なれども詣でざる事は、昔この国いまだなかりける時、大海の底に大日の印文ありけるによりて、大神宮御銚さしくだして探り給ひける。その銚の滴り、露の如くなりける時、第六天の魔王遙に見て、『この滴り国と成りて、仏法を流布し、人、生死を出づべき相あり』とて、失はんために下りけるを、大

神宮、魔王にあひて、『我三宝の名も言わじ、身にも近づけじ。とくとく帰り上り給へ』とこしらへ仰せられければ、返りにけり。⁽²¹⁾

この話の趣旨は、伊勢神宮では、表面的にはこの密約のために、仏教が排除されているが、実は三宝を守っていることにある。ただ、絶対的な存在である天照大神が、第六天魔王を怖れ密約を交わす。つまり、ここでは天照大神が相対化されていると考えることができる。言い換えれば、天照大神のような最高神と実者神の距離が近くなっていると考えられる。

次に、この巻第一には、実者神の肯定とは別に、逆本地垂迹説への萌芽と考えられる箇所がある。

「然るに本地垂迹、その体じけれども、機に望む利益、暫く勝劣あるべし。我が国の利益は垂迹の面猶優れておはするにや。昔、役行者、吉野山に行はれける時、釈迦の像、現じ給ひけるを、「この御形にて、この国の衆生は化し難かるべし。隠れさせ給へ」と申されければ、次に弥勒の御形を現じ給ふ。「猶これもかなはじ」と申されける時、当時の蔵王とて恐ろしげなる御形を現じ給ひける時、「これこそ我が国の能化」と申し給ひければ、今跡を垂れ給ふ。行人の信心深くして、心を一つにし敬ふに、実ある時は感応ありて、利益にあづかる。」⁽²²⁾

ここでは、日本の衆生の機根を考えると、本地の仏よりも垂迹の神の方が優れていると述べている。すなわち、日本の衆生の教化には、釈迦や弥勒の姿より、蔵王権現の姿の方が優れている。もちろん、本地を神、垂迹を仏とはしていないが、神優位の思想を見ることができている。

最後に、無住と本覚思想の関係についてふれる。小林直樹氏は、『沙石集』前半の巻第一から巻第五までが、真如の顕現というモチーフから構成されていると主張している。そして、無住が本覚思想の強い影響を受けていると説く。⁽²³⁾ 古橋恒夫氏は、『沙石集』の後に書かれた無住の『聖財集』に注目する。ここには、『大乘起信

『論』を基に、本覚、不覚、始覚について述べられていることから、無住と本覚思想との関係性を指摘している²⁴。三崎義泉氏も、同様の指摘をしている。様々な宗派を兼学した無住は、本覚思想についても一定の知識があったものと考えられる。そうした思想を基に、『沙石集』における実者神の肯定に至った可能性は否定できない。以上、『沙石集』における実者神について見てきた。実者神は、仏・菩薩が衆生を仏道に導くための仮の姿として表現されている。しかし、まだ、邪神としての実者神を肯定した訳ではない。また、天照大神は相対化されているが、実者神と平等な存在には至っていない。

五 『神道集』における実者神

『神道集』は、南北朝期に成立した唱導説話集である。各巻の巻頭に安居院の記載がされている。安居院は、叡山竹林院の京都における里坊で、天台僧（檀那流）の澄憲（一一二六～一二〇三）が創立し、唱導による教化で有名である。ただし、安居院作とすることは無理があり、作者は不明である。しかし、安居院及びその唱導とは何らかの関係があった可能性はある。『神道集』は、十巻五十編の説話からなり、諸社の縁起と神々の本地を説いている。この巻一ノ一「神道由来之事」は、総説的な部分であり、神道思想について述べられている。ここで、権者神と実者神について説かれている。

「問或人云毘呌論云一度神ヲ礼五百生虵身ノ報ヲ受ク。若奈者誰カ心有ラン神道ヲ可礼耶。答神道有権実。瑞ノ義ナリ。悪霊悪虵ノ物ニ耶付テ人ヲ悩乱スル実者ハ皆虵鬼等ナリ。権者ノ神ハ往古ノ如来深位大士。教化六道ノ約束ニテ利益衆生ノ為和光垂迹シタマフナリ。八相成道ノ終リヲ論ズ。尤可皈依。但亦実者神

ナリト云トモ神ト顕タマフコト無ニ非ズ。後生利益ノ契リノ為ニ礼ヲ作者其失有可不。日本ハ本自神国ナリ。惣テ敬礼可。国ノ風俗ハ凡愚権実ヲバ弁難。只神ニ随テ敬礼ス。何レノ失有ラン。況ヤ設ヒ始タル実者ナリト云トモ終ニハ権者眷属ト成。亦如此得失待相望ノ義ノ意ハ権者ノ神ニ対シテ実者ノ失ヲ立ル目ナリ。例セバ法花中ニハ大小権実顕密等此ヲ行ヒ彼ヲ勤レバ然ト雖縁ニ依亦此ヲ捨ル事無シ云云。問大小権実明神ノ本地ハ実ニハ仏菩薩ト云ヘリ。以何可知耶。答実ニ此条不思議也。指テ修多羅明文ニモ見不。又菩薩ノ論藏ニモ判不。只本朝ハ辺州ナルガ故ニ仏説モ無論判モ無。自仏菩薩我朝ニ来下シハ明神ノ垂迹人界応生。之二依神託宣ヲバ人相承ナリ。之以内証トス。衆生ヲ利益シタマフナン。見ヌル上ハ日本ニハ多神明存ス。其本地ニハ豈ニ仏菩薩ニ非耶。」²⁰

ここでは、権者神を仏菩薩が衆生を教化するために垂迹した神とし、実者神を蛇神や鬼神としている。これは、当時の権者神と実者神の定義と変わらない。しかし、実者神は、利益がないわけではないため、敬礼すべきとしている。さらには、実者神は、最後には権者神の眷属となると説いている。その上、この実者神が、仏菩薩の本地を持つところまで踏み込んでいる。権者神にのみ適用された本地垂迹説が、実者神にも適用されている。まさに、実者神が肯定されていると言える。

『神道集』における実者神の肯定は、物語の中でも語られている。その代表例が、巻八ノ四十九「上野国那波八郎大明神の事」である。ここでは、八人兄弟の末弟八郎が総領になるが、それに嫉妬した七人の兄達に殺害される。しかし、八郎は大蛇に転生して、七人の兄及びその一族を皆殺しにするだけでなく、国中の人々を殺し始めた。そこへ、宮内判官宗光が現れ、八郎に法華経を読み上げると、八郎は改心する。そして、八郎は、大蛇から八郎大明神に転生すると同時に、薬王菩薩の本地が与えられる。八郎は、復讐の為とはいえ、多くの人を殺したことから、まさに実者神である。しかし、最終的には、仏・菩薩の本地が与えられる。

卷二ノ七「二所権現の事」では、主人公常在御前を殺そうとした継母は、大蛇に転生した後、本地は与えられないが、石神になる。また、卷十一「諏訪縁起の事」では、蛇身になった甲賀三郎が、本地が普賢菩薩の諏訪大明神になる。このように、『神道集』には、当時としてめずらしく、実者神を肯定的にとらえる思想が流れている。

『神道集』と本覚思想の関係についての先行研究は、田村芳郎氏が、「神道由来之事」による実者神の肯定に一部触れたのみで、ほとんどない状況である。ただ、この実者神を通じて本覚思想との関係が指摘できる可能性はあり、今後の課題としたい。

鎌倉、南北朝時代にかけて、実者神が否定される中、『沙石集』と『神道集』が異なる思想を説いている。筑土鈴寛氏は、「神道由来之事」の前半部分が、『沙石集』に依っていることを指摘している。²⁷⁾しかし、『神道集』は、『沙石集』よりもよりも実者神の肯定が強まっている。『沙石集』の実者神が、仏・菩薩が衆生を仏道に導くための仮の姿とされるが、『神道集』における実者神は、殺戮を含め様々な悪事に手を染めているのも関わらず、仏・菩薩の本地が与えられる。まさに邪神が邪神として肯定されている。しかし、この『神道集』においても、この実者神と権者神を同列に置くところまでには至っていない。両者が完全に平等になるのは、吉田兼俱を待つ必要がある。

六 吉田兼俱における実者神

最後に、吉田兼俱による実者神に関する考え方について述べる。まず、兼俱の『神道大意』について見てみ

る。「神道大意」は、様々な祖先の名前に仮託されたものが数多く存在しているが、自身の名前を付したものに、以下のような記載がある。

「神ニ三種ノ位アリ、一ニハ元神、二ニハ託神、三ニハ鬼神、初ノ元神ト者日月星辰等ノ神ナリ、其光天ニ現エ、其徳三界ニ至レリ、然トモ直ニ其妙躰世ヲ謁スルコトアタハス、故ニ淨妙不測ノ元神ト号ス、二ニ託神ト者非情ノ精神ナリ、非情トハ草木等ノ類ナリ、地ニ着テ氣ヲハコヒ、空ニ出テ形ヲアラハシ、四季ニ應エ生老病死ノ色アリ、然トモ全ク無心無念ナリ、是ヲ託神ト号ス、三ニ鬼神ト者人心動作ニ随ヲ云、纒一念動ケハ是心他境ニ移ル、故ニ天地ヲ感レハ、天地ノ靈我心ニ皈ス、心ニ草木ヲ感レハ、草木ノ靈我心ニ皈ス、心ニ畜類ヲ感レハ、畜類ノ靈我心ニ皈ス、心ニ他人ヲ感レハ、他人ノ靈我心ニ皈ス」²⁸⁾

神を三種に分けているが、鬼神が実者神であると考えられる。鬼神も、元神同様肯定されている。また、非情である託神も肯定されている。次に、『唯一神道名法要集』には、以下の表現がある。

「問ふ。何ぞ神道と謂はずして真道ト謂ふぞ哉。

答ふ。神トハ善悪邪正、一切靈性の通号也。所謂純一無雜の真元ノ神ヲ明カサンガ為ニ、之ヲ真道ト謂ふ者也」²⁹⁾

神に善悪邪正の区別をつけない、絶対的な平等が説かれている。さらに、同様の思想が以下にも見られる。

「問ふ。神道の所談ハ、吾ガ国の根奥、独立の一法也。幸ニ宗源ノ二字ヲ得タリ。何ゾ一家の宗義ヲ立てざル哉。

答ふ。吾が神道は、万物ニ在リテ一物ニ留らず。所謂風波、雲霧、動静、進退、昼夜、隠顕、冷寒、温熱、善悪の報、邪正の差、統ベテ吾が神明の所為ニ非ずといふこと莫き者也。故に天地の心も神也。諸仏の心も是れ神也。鬼畜ノ心も是れ神也。草木ノ心も是れ神也。何ニ況んや人倫に於いてを哉。意を以て理

を成し、意を以て言を成し、意を以て手足ヲ成す。皆是れ心神の所為也。一切の含靈は神に非ずといふことと莫き者也。故に成仏ト云ひテ成神ト云はず。物トシテ神靈ヲ含藏せずといふこと無し。故に神経に云はク、「天ニ神道無ければ、則ち三光有ること無く、亦四時も無し。地ニ神道無ければ、則ち五行有ること無く、亦万物も無し。人ニ神道無ければ、則ち一命有ること無く、亦方法も無し」と。⁽³⁰⁾

善悪、邪正の区別なく、すべて神の行為と考へ、諸仏の心も神であるとすると同列で、鬼畜の心も神であると主張している。『沙石集』、『神道集』以上に、権者神と実者神の区別が無くなり、絶対的な平等の見地に立っている。吉田兼俱に至って、実者神の肯定は徹底され、反本地垂迹説に至るものと考えられる。

七 本覚思想における逆転の思想

最後に補論として、逆転の思想について考えてみる。仏優位である本地垂迹説が神優位の反本地垂迹説に転換するためには、絶対平等だけでなく、価値が逆転する思想も重要となる。すべてを現実肯定する本覚思想ではあるが、こうした逆転の思想も内包されているのであるうか。代表的な本覚思想文献の一つ、『漢光類聚』にその思想が見られる。

「蘇悉地経の十七会の曼陀羅にも、釈迦をば浅略の一重に安んじ、阿難をば慈悲不断の境第七重に安んず。慈覚大師、この分を見て、「釈迦の説法は五十年に限る。阿難の色塵所顕の法は、遠く人寿六万歳に至る。故に、阿難は釈迦より勝れたり」と云ひ畢つて、諸法の性を尋ぬるに、実仏の相あることなし。ただ諸法を指すに利益あり。これ真の如來說法の相なりと。」⁽³¹⁾

もちろん、ここでは諸法実相が説かれているが、阿難が釈迦より優位であると言う表現に、逆転の思想が見られる。類似の例として、『漢光類聚』に以下のような記載がある。

「蘇悉地経に、釈迦を浅仏となし、提婆を極仏となすは、この意なり。慈覚大師、この文を受けて、浅略門の時は、釈迦を善人となし、提婆を逆人となす。深秘門の時は、釈迦・提婆俱に一如なり。秘中深秘門の時は、釈迦は断相修頭の仏なるが故に浅となし、提婆は不転本極の妙体なるが故に深となす。秘秘中深秘門の時は、釈迦にもあらず提婆にもあらず、本極無相なる真意を法の大宗となす」と釈したまへり。今の文をば、かくの如く心得べし。」⁽³²⁾

これは、『漢光類聚』に頻繁に出てくる四重興廢の変形ではあるが、釈迦と提婆を同じと考えるより、提婆が釈迦より優位であるという考えの方が優れているとしている。ここにも、逆転の思想を見ることができる。吉田兼俱の思想と本覚思想の親和性は指摘できるが、兼俱と『漢光類聚』の関係については不明である。ただ、両者が類似した思想を共有していた可能性はある。

結 論

本稿では、吉田兼俱による反本地垂迹説の道程について、『沙石集』や『神道集』といった仏教説話や縁起物語を通じて考察したものである。反本地垂迹説は、絶対平等で、徹底的な現実肯定を行う本覚思想の影響を受けていると考えられる。この本覚思想を神道の中で見るなら、邪神とされた実者神の肯定が重要な要素となると考えられる。すなわち、この実者神の肯定によって、反本地垂迹説が導かれる。

本稿では、この実者神の肯定を、『沙石集』、『神道集』、吉田兼俱について考察した。まず、『沙石集』においては、実者神は、仏・菩薩が衆生を仏道に導くための仮の姿として表現されている。しかし、まだ、実者神を邪神として肯定するに至っていない。これが、『神道集』になると、邪神を邪神として肯定される。しかし、実者神と権者神を同列に置くところまでには至っていない。最後に吉田兼俱によって、権者神と実者神の区別が無くなり、絶対的な平等の見地に立つ。この実者神の肯定を通して、反本地垂迹説に至ると考えられる。

吉田兼俱について、極めて多くの研究があるが、彼の反本地垂迹説の研究については、あまり多くはない。まず、伊藤聡氏は、兼俱が神本仏迹も仏本神迹も等価なものとしていると指摘している。³³⁾また、佐藤真人氏も兼俱の反本地垂迹説が、本地垂迹説を否定するものではなかった主張している。³⁴⁾さらに、前出した森瑞枝氏は、兼俱の根葉花実論を、両部神道の『鼻婦書』や慈遍の説との比較検証を行っている。³⁵⁾反本地垂迹説、本覚思想、実者神の肯定といった文脈で分析を行ったのが、前出した田村芳郎氏である。³⁶⁾その意味では、本稿は、田村芳郎氏の分析フレームワークの延長線上になる。ただし、氏が、反本地垂迹説への経路について、両部神道、伊勢神道、慈遍、良遍、吉田兼俱といった神道理論系列で分析されているのに対し、本稿は『沙石集』や『神道集』といった仏教説話や縁起物語を研究対象としているのが本稿の新規性であると考える。

註

- (1) 田嶋一夫『神道集』の評価について『中世往生伝と説話の視界』笠間書院、二〇一五年、一三九～二六五頁、佐藤弘夫「崇り神の変身く崇る神から罰する神へ」『日本思想史学』三一、一九九九年、四五～六三頁。
- (2) 田村芳郎「天台本覚思想概説」『天台本覚論く日本思想体系9』岩波書店、一九七三年、四七七～五四八頁。
- (3) 『中臣祓訓解』『中世神道論く日本思想体系19』岩波書店、一九七七年、五四～五五頁。

- (4) 田村芳朗「本覚思想と神道理論」『印度學佛教學研究』二八(一)、一九七九年、六一～六八頁。また、大久保良峻氏も、本覚の語のもとに一切を絶対肯定していくことと、基本的には異なっているか、あるいは、そのような観点にまでいたっていないと説いている。大久保良峻「本覚思想と神」『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、二〇一一年、六五～八二頁。
- (5) 原克昭『中世日本紀論考』法蔵館、二〇一二年。
- (6) 伊藤聡「唯一神道と吉田兼俱」『国文学・解釈と鑑賞／至文堂編』六〇巻二二号、一九九五年、七五頁。
- (7) 「唯一神道名法要集」『中世神道論／日本思想体系19』岩波書店、一九七七年、二二一～二二二頁。
- (8) 伊藤聡「唯一神道と吉田兼俱」『国文学・解釈と鑑賞／至文堂編』六〇巻二二号、一九九五年、七五頁。
- (9) 岡田荘司「吉田兼俱の日本書紀研究／兼俱書写」『日本書紀纂疏』改訂本(神道史の諸相)『国学院雑誌』八二巻二一
号、一九八一年、一六五～一七七頁。
- (10) 阿蘇谷正彦「一条兼良と吉田兼俱」『神道』説の比較』『国学院雑誌』八二巻二一号、一九八一年、二二八～二三三頁。
- (11) 「唯一神道名法要集」『中世神道論／日本思想体系19』岩波書店、一九七七年、一三六～一三七頁。
- (12) 森瑞枝「吉田神道の根本枝葉実説再考」『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、二〇一一年、三二二～三三六頁。
- (13) 「三十四箇事書」『天台本覚論／日本思想体系9』岩波書店、一九七三年、一五三頁。
- (14) 「三十四箇事書」『天台本覚論／日本思想体系9』岩波書店、一九七三年、一五三頁。
- (15) 田村芳朗「本覚思想と神道理論」『印度学仏教学研究』五五号、一九七九年、六一～六八頁。
- (16) 「唯一神道名法要集」『中世神道論／日本思想体系19』岩波書店、一九七七年、二四七頁。
- (17) 田嶋一夫「中世往生伝と説話の視界」笠間書院、二〇一五年。
- (18) 吉田唯「無住」『沙石集』における習合思想の一過程／真言の「両界」と「両宮」について』『國文學論叢』五二、二〇〇七年、三七～五三頁。
- (19) 『沙石集』新編日本古典文学全集五二、小学館、二〇〇一年、二九～三〇頁。
- (20) 伊藤聡氏によれば、天照大神と第六天魔王との密約の初出は『沙石集』ではなく、『中臣祓訓解』である。ただし、その内容は大きく変容している。伊藤聡「第六天魔王王説の成立・特に『中臣祓訓解』の所説を中心として」四四(七)、一九九五年、六七～七七頁。一方、多田實道氏は、『沙石集』の天照大神と第六天魔王との密約は、内宮祠官荒木田氏の神道説であると主張している。多田實道「内宮祠官荒木田氏による神道説の形成」『藝林』六五(二)、二〇一六年、五六～八六頁。

- (21) 『沙石集』 新編日本古典文学全集五二、小学館、二〇〇一年、二二頁。
- (22) 『沙石集』 新編日本古典文学全集五二、小学館、二〇〇一年、三二～三三頁。
- (23) 小林直樹「真如の顕現」『沙石集』の構想」『大阪市立大学文学部・人文研究』四六(二)、一九九四年、五三～七八頁。
- (24) 古橋恒夫「無住一円の思想と『沙石集』」『無住試論』、『聖徳大学言語文化研究所論叢』一三、二〇〇六年、二四五～二七九頁。
- (25) 三崎義泉「沙石集の本覚思想と神」『天台学报』二二、一九八〇年、三四～四一頁。
- (26) 『神道集(赤木文庫本)』貴重古典籍叢刊1、角川書店、一九六八年、一七～一九頁。
- (27) 筑土鈴寛「中世・宗教芸文の研究・二」『筑土鈴寛著作集第四卷』せりか書房、一九七六年。
- (28) 『神道大意』『神道体系 卜部神道(上)』神道体系編纂会、一九八五年、一三～一四頁。
- (29) 『唯一神道名法要集』『中世神道論』日本思想体系19』岩波書店、一九七七年、二四六頁。
- (30) 『唯一神道名法要集』『中世神道論』日本思想体系19』岩波書店、一九七七年、二四六～二四七頁。
- (31) 『漢光類聚』『天台本覚論』日本思想体系9』岩波書店、一九七三年、二〇一～二〇二頁。
- (32) 『漢光類聚』『天台本覚論』日本思想体系9』岩波書店、一九七三年、二六二～二六三頁。
- (33) 伊藤聡「神道の中世」伊勢神宮・吉田神道・中世日本紀』中公選書、二〇二〇年。
- (34) 佐藤真人「神仏習合の諸様相」『東洋学術研究』二九(四)、一九九〇年、一一一～一二二頁。
- (35) 森瑞枝「吉田神道の根本枝葉実説再考」『中世神話と神祇・神道世界』竹林舎、二〇一一年、三二二～三三六頁。
- (36) 田村芳朗「本覚思想と神道理論」『印度学仏教学研究』五五号、一九七九年、六一～六八頁。

(武蔵野大学仏教文化研究所研究生 博士(仏教学))